

科目名	臨床運動学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・治療室
授業概要	基本動作のメカニズムを理解するための、①運動力学・生体力学の基礎知識と動作への解釈、②正常動作の生体力学的メカニズムとその解釈、③疾患特有の姿勢・動作と病態・障害像との関係、④疾患・障害別基本動作分析のチェックポイントについて学習する。								
一般目標	- 基本動作（寝返り・起き上がり・立ち上がり）が遂行可能となるメカニズムを修得する。 - 主な疾患・障害の基本動作分析を修得する。								
テキスト 参考書等	動作分析 臨床活用講座（メジカルビュー社）								

到達目標		
知識（認知領域） ・基本動作について分析し、説明することができる。		
技術（精神運動領域） ・基本動作について分析し、模倣することができる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	寝返り基礎	寝返りの正常パターンについて理解し、説明することができる。
2	寝返り評価	寝返りの評価をすることができる。
3	寝返り動作分析	寝返りの分析ができる。
4	寝返り動作分析課題作成	症例を通じて寝返りの分析ができる。
5	寝返り動作分析課題作成	症例を通じて寝返りの分析ができる。
6	起き上がり基礎	起き上がりの正常パターンについて理解し、説明することができる。
7	起き上がり評価	起き上がりの評価をすることができる。
8	起き上がり動作分析	起き上がりの分析ができる。
9	起き上がり動作分析課題作成	症例を通じて起き上がりの分析ができる。
10	起き上がり動作分析課題作成	症例を通じて起き上がりの分析ができる。
11	寝返り、起き上がりまとめ	寝返り、起き上がり動作についてまとめることができる。
12	立ち上がり基礎	立ち上がりの基礎について理解し説明できる。
13	立ち上がり観察課題作成	立ち上がりの観察ができる。
14	立ち上がり評価	立ち上がりの評価をすることができる。
15	立ち上がり動作分析課題作成	症例を通じて立ち上がりの分析ができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート		○		評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法業務の中で、動作能力向上アプローチに基づいた動作分析の経験あり。	

科目名	臨床運動学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・機能訓練室
授業概要	歩行動作のメカニズムを理解するための、①運動力学・生体力学の基礎知識と動作への解釈、②正常動作の生体力学的メカニズムとその解釈、③疾患特有の姿勢・動作と病態・障害像との関係、④疾患・障害別歩行分析のチェックポイントについて学習する。								
一般目標	・歩行動作のメカニズムを修得する。 ・主な疾患・障害の歩行動作分析を修得する。								
テキスト 参考書等	観察による歩行分析（医学書院） 動作分析 臨床活用講座（メジカルビュー社）								

到達目標		
知識（認知領域）		
・歩行動作について分析し、説明することができる。		
技術（精神運動領域）		
・歩行動作について分析し、模倣することができる。		
態度（情意領域）		
- 授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） - 授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	正常歩行における関節運動と機能	正常歩行における関節運動と機能について説明できる。
2	10m歩行	10m歩行について理解し説明できる。
3	正常歩行のメカニズム	歩行のメカニズムについて説明できる。
4	逸脱歩行の原因①（足関節）	逸脱歩行の原因（足関節）について説明できる。
5	逸脱歩行の原因②（膝関節）	逸脱歩行の原因（膝関節）について説明できる。
6	逸脱歩行の原因③（股関節）	逸脱歩行の原因（股関節）について説明できる。
7	逸脱歩行の原因④（骨盤・体幹）	逸脱歩行の原因（骨盤・体幹）について説明できる。
8	評価の意義と目的	逸脱歩行に関連した評価の意義と目的について理解し、説明できる。
9	脳卒中に関連した逸脱歩行に対する治療アプローチ	脳卒中に関連した逸脱歩行に対する治療アプローチの方法について説明できる。
10	症例検討	症例の歩容を模倣したうえで、評価・介入ポイントを理解し説明できる。
11	逸脱現象に対するプログラム立案	逸脱現象に対するプログラム立案ができる。
12	歩行分析のまとめ①	逸脱歩行に対する理学療法について理解し説明できる。
13	歩行分析演習（症例１）	動画を確認しながら歩行分析ができる。 症例の評価、治療について説明できる。
14	歩行分析演習（症例２）	動画を確認しながら歩行分析ができる。 症例の評価、治療について説明できる。
15	歩行分析のまとめ	歩行分析の方法について説明できる。 歩行分析の目的と各種評価との関連について説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（４）：９０点以上
小テスト	○			評価なし	優（３）：８０～８９点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（２）：７０～７９点
授業態度				評価なし	可（１）：６０～６９点
発表・作品		○		評価なし	不可（０）：６０点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法業務の中で、動作能力向上アプローチに基づいた動作分析の経験あり。	

科目名	研究法A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・パソコン室
授業概要	エビデンス（根拠）に基づく理学療法実践の展開力を養うことをテーマとし、研究の基礎について倫理的側面も含めて学び、資料や文献を適切に読み解く能力を修得する。 授業後半では、論理的思考力や表現力を身につけるため、								
一般目標	・エビデンスに基づく理学療法を展開するために、研究用語や研究デザイン、研究倫理といった基礎を学び、資料や文献を適切に読み解くことができる。 ・理学療法における疑問を構造化した上で、解決するために必要な情報を収集し、批判的吟味ができる。								
テキスト 参考書等	テキスト：最新理学療法講座 理学療法研究法（医歯薬） 参考書：PT・OTのための臨床研究はじめての一步（羊土社）、理学療法研究の進め方（文光堂）、標準理学療法学専門分野 理学療法研究法第3版（医学書院）。								
到達目標									
知識（認知領域） ・研究デザインについて説明できる。・エビデンスレベルについて説明できる。・偶然誤差・系統誤差（バイアス）を説明できる。・研究倫理について説明できる。									
技術（精神運動領域） ・PICO・PECOによりCQ・RQを構造化できる。・EBPTのステップを踏み批判的吟味ができる。・目的に応じて文献をリサーチし、入手した情報を適切に管理することができる。									
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加できる。									
回数	授業内容				授業目標				
1	理学療法学研究の役割				・理学療法研究の役割を理解し、研究法を学ぶための準備が行える。 ・研究機関や基礎研究、臨床研究など、理学療法学研究における各分野の取り組みを知ることができる。 ・研究の意義について説明できる。				
2	臨床疑問・研究疑問について -PICO・PECOによる構造化-				・臨床的疑問（CQ）や研究的疑問（RQ）について説明できる。 ・課題として提示されたCQやRQに関連する文献を収集できる。 ・文献情報から、CQやRQをPICO・PECOを用いて構造化できる。				
3	文献の質・文献検索・文献管理				・短報・原著・総説・診療ガイドラインなど、文献の種類を説明できる。 ・国内外の文献データベースを活用し、目的とする文献を検索できる。 ・収集した文献情報を適切に管理できる。				
4	研究デザイン① 観察研究				・観察研究のデザインについて、メリットデメリットを説明できる。 ・STROBE声明を説明できる。 ・CQやRQに応じた研究デザインについて説明できる。				
5	研究デザイン② 介入研究				・RCTにおけるランダム割り付けやコンシールメントなどの用語を説明できる。 ・CONSORT声明を説明できる。 ・CQやRQに応じた研究デザインについて説明できる。				
6	エビデンスレベル、EBPT				・エビデンスレベルを説明できる。 ・EBPTのステップを説明できる。 ・事例を通してEBPTを実践できる。				
7	偶然誤差・系統誤差（バイアス）				・疫学研究の必要性や種類を説明できる。 ・偶然誤差や系統誤差を説明できる。 ・交絡を説明できる。				
8	研究倫理				・研究者倫理について説明できる。 ・研究対象者に対する倫理的配慮について説明できる。 ・研究倫理審査や利益相反について説明できる。				
9	アカデミックライティング①				・論文・レポート・作文・感想文の違いを説明できる。 ・課題を分析し、わかりやすく客観的な文章を記載できる。 ・論証するための根拠となる情報を収集できる。				
10	アカデミックライティング②				・序論・本論・結論の構成でアウトラインを練ることができる。 ・書いてはいけないことに留意して記載できる。 ・パラグラフライティングで記載できる。				
11	アカデミックライティング③				・演繹や帰納といった説明法を用いて論証できる。 ・句読点や括弧、文章の長さに留意して記載できる。 ・剽窃・引用・倫理問題に留意して記載できる。				
12	口述発表スライド作成①				・発表内容に応じた適当なタイトルを提示できる。 ・導入部に、関心・興味など、発表のテーマに繋がる情報を提示できる。 ・臨床上の背景や問題点、課題を提示できる。				
13	口述発表スライド作成②				・対象者情報や研究デザイン、測定項目、統計解析など、方法について提示できる。 ・解析の目的や統計解析の手法を提示できる。 ・アウトカムや結果について、図表を用いて視覚的に提示できる。				
14	口述発表スライド作成③				・他の文献との比較を通じ、論理的な考察(論証を支持する内容)を提示できる。 ・結果を受け、冒頭に掲げた問いに対する結論を提示できる。 ・明らかになっていないことなど、限界と今後の課題を提示できる。				
15	口述発表				・発表において、明確で一貫性のあるメインメッセージを発表できる。 ・規定の時間内に口述発表を終えることができる。 ・フロアや座長からの質問に対して応答できる。				
成績評価方法									
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準				
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上				
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点				
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点				
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点				
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得				
演習				評価なし					
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数				
担当教員	川崎 裕史			実務経験紹介	本校教員として研究法の講義を担当し、卒業研究の指導を行っている。				

科目名	研究法B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	P T 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・パソコン室
授業概要	理学療法学研究における科学的思考の基盤を涵養することを目的に、統計学の基礎から医療統計における代表的な統計解析の手法を統計ソフトを用いて実践的に学習する。								
一般目標	・統計用語について説明できる。 ・研究目的に応じた統計解析の手法を選択することができる。 ・統計資料や研究論文などの統計解析の結果を読み、説明することができる。								
テキスト 参考書等	テキスト：最新理学療法学講座 理学療法研究法（医歯薬） 参考書：みんなの医療統計12日間で基礎理論とEZRを完全マスター（講談社）、EZRでやさしく学ぶ統計学（中外医学社）、データの活用・データの分析（東京図書）								

到達目標		
知識（認知領域）		
- 統計用語について説明できる。 - 研究に必要な統計検定の選択について説明できる。 - 代表的な統計手法の結果の読み方を説明できる。 - サンプルサイズについて説明できる。		
技術（精神運動領域）		
- 解析に用いるデータを種類に応じて適切に整理できる。 - 表計算ソフトを使用してグラフを作成できる。 - 研究に応じたサンプルサイズを求めることができる。 - 統計ソフトを使用して、目的に応じた統計解析を行うことができる。		
態度（情意領域）		
- 授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） - 授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	統計の役割、データの種類とグラフ	- 統計学の役割や統計学的問題解決のプロセスを説明できる。 - 質的変数と量的変数の違いを説明することができる。 - 基本的なグラフの特徴を理解した上で、結果を解釈し説明できる。
2	量的変数の要約方法	- 量的変数について、度数分布表の作成方法と意味を説明できる。 - ヒストグラムの作成方法と意味を説明できる。 - データの分布を要約し、データの特徴や散らばりを説明できる。
3	確率の基礎、確率変数と確率分布①	- 様々な事象の確率を求めることができる。 - 理論的確率と経験的確率を説明できる。 - 確率変数と確率分布の考え方と関係を説明できる。
4	確率の基礎、確率変数と確率分布②	- 確率分布から確率変数の平均、分散、標準偏差を計算できる。 - 二項分布の導き方と性質を説明できる。 - 正規分布の特徴と性質を説明できる。
5	仮説検定	- 標本分布を用いて母平均や母比率の区間推定ができる。 - 信頼度・信頼区間を求め、結果を説明できる。 - 有意水準と棄却域を理解し、帰無仮説と対立仮説を説明できる。
6	データを取るための実践と統計ソフト	- 取得したデータを表計算ソフトウェアに入力できる。 - 統計ソフトの起動やデータの読み込みなどの基本操作ができる。 - 表計算ソフトで作成したデータを、表計算ソフトに読み込める形式に整理する際の留意点を説明できる。
7	記述統計・1変数データの分析	- 分布の位置を表す代表値の意味や分布の様子を説明できる。 - 正規分布、パラメトリック・ノンパラメトリックについて説明できる。 - 探索的データ解析法と外れ値について説明できる。
8	2変量解析①平均・中央値の差の検定 t検定、Mann-WhitneyのU検定	- 統計解析の基本である2変数の平均・中央値の差の検定について説明できる。 - 対応の有無、パラメトリック・ノンパラメトリック、分散を理解した上で、目的に応じた統計解析手法を選択し、実施できる。
9	2変量解析②平均・中央値の差の検定 対応のあるt検定、Mann-Whitneyの符号順位和検定	- 統計解析の基本である2変数の平均・中央値の差の検定について説明できる。 - 対応の有無、パラメトリック・ノンパラメトリック、分散を理解した上で、目的に応じた統計解析手法を選択し、実施できる。
10	分散分析	- 多重性の問題と分散分析の概要を理解し、種類・適用の仕方・手順を説明できる。 - 対応の有無、パラメトリック・ノンパラメトリックを理解した上で、目的に応じた統計解析を実施できる。
11	線形回帰と相関係数	- 散布図の分布より回帰直線や相関係数を理解し、線形回帰・相関分析の概略を説明できる。 - パラメトリック・ノンパラメトリックを理解した上で、目的に応じた統計手法を選択し、統計解析を実施できる。
12	多変量解析①重回帰	- 単変量解析と多変量解析の違い、重回帰分析の概要を説明できる。 - 交絡、多重共線性を理解した上で、目的に応じた説明変数を選択し、統計解析を実施できる。 - 重回帰分析の結果を説明できる。
13	多変量解析②多重ロジスティック回帰	- 感度・特異度・ROC図、多重ロジスティック回帰分析の概要を説明できる。 - オッズ比と関連した臨床判断指標を説明できる。 - 多重ロジスティック回帰の結果を説明できる。
14	多変量解析③Cox比例ハザード回帰	- Logrank検定、Kaplan-Meier曲線の概要を説明できる。 - 目的に応じた説明変数を選択し、統計解析を実施できる。 - Cox比例ハザード回帰の結果を説明できる。
15	統計解析の選び方	αエラー・βエラー・検出力からサンプルサイズを計算できる。 - 用意された各種データより、統計解析ソフトを用いて適切な手法を選択できる。 - 統計解析の結果を説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品 演習				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	本校教員として研究法の講義を担当し、卒業研究の指導を行っている。	

科目名	理学療法概論				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	301教室
授業概要	臨床現場において患者等に対して一定水準以上の治療・サービスを提供するために必要なマネジメント知識、職場の管理運営など学ぶ。								
一般目標	理学療法管理と何かを答えることができる。 専門職として資源の効果的・効率的活用手段を答えることができる。								
テキスト 参考書等	理学療法管理学 良質な医療・介護提供のための管理運営・政策論（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域） 1・理学療法の管理運営を説明できる 2・良質な医療の提供について説明できる 3・記録方法とデータ管理について説明できる。 4・社会保障と保険制度について説明できる。 5・身分法と職能団体について説明できる。 6・職域拡大と理学療法士の未来像について説明できる。		
技術（精神運動領域） なし		
態度（情意領域） 積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	管理運営（管理者の役割）	・管理者の役割と管理の手法について説明できる。
2	管理運営（労務管理）	・メンタルヘルス・時間外労働・ハラスメントについて説明できる。
3	管理運営（管理者の質）	・論理的思考、企画力、プレゼンテーション力が身についている。
4	管理運営（危機管理と感染予防）	・リスクマネジメントと感染予防について説明できる。
5	理学療法士に求められる資質、接遇、コミュニケーション	・理学療法士としてふさわしい接遇、コミュニケーションができる。
6	記録方法とデータ管理	・診療記録ができる。
7	社会保障と保険制度（診療報酬）	・診療報酬について説明ができる。
8	社会保障と保険制度（医療・介護の財源）	・保険の財源と保険点数について説明できる
9	身分法と職能団体	・理学療法士の身分と職能団体について説明できる。
10	身分法と職能団体	・政治活動の必要性について説明できる。
11	職域の拡大	・理学療法士の職域の拡大について説明できる。
12	理学療法士の未来像	・理学療法士の未来像について説明ができる。
13	理学療法士の未来像	・どのような理学療法士となるかをプレゼンテーションできる。
14	理学療法士の未来像	・どのような理学療法士となるかをプレゼンテーションできる。
15	理学療法士の未来像	・どのような理学療法士となるかをプレゼンテーションできる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として回復期・生活期の多様な病院・施設に勤務経験あり	

科目名	理学療法評価法実習 B				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	P T 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室／パソコン室
授業概要	症例レポートの作成方法から、代表的な疾患の症例検討ができるようになるように学修を進めていく。								
一般目標	・症例レポートが作成を習得する。 ・症例検討を習得する。 ・各評価のアセスメントが作成でき、統合解釈する。								
テキスト参考書等	必要に応じて資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域）		
・症例検討ができるようになる。 ・各評価のアセスメントが作成でき、統合解釈ができるようになる。		
技術（精神運動領域）		
・症例レポートが作成できるようになる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	理学療法評価の流れ	理学療法評価の流れを理解することができる。
2	レポート作成方法	レポート作成方法を説明することができる。
3	評価アセスメントの書き方	評価アセスメントを書くことができる。
4	各アセスメントの統合と解釈の仕方	各アセスメントの統合と解釈することができる。
5	文献レビューの方法	症例検討に必要な文献を精読することができる。
6	問題点の抽出、問題点の整理	問題点の抽出、問題点の整理することができる。
7	理学療法プログラムの立案	理学療法プログラムの立案することができる。
8	症例検討 整形外科疾患のレポート作成	症例検討 整形外科疾患のレポート作成することができる。
9	症例検討 整形外科疾患のレポート作成	症例検討 整形外科疾患のレポート作成することができる。
10	症例検討 整形外科疾患のレポート作成	症例検討 整形外科疾患のレポート作成することができる。
11	症例検討 脳血管疾患のレポート作成	症例検討 脳血管疾患のレポート作成できる。
12	症例検討 脳血管疾患のレポート作成	症例検討 脳血管疾患のレポート作成できる。
13	症例検討 脳血管疾患のレポート作成	症例検討 脳血管疾患のレポート作成できる。
14	症例検討 期末試験用症例のレポート作成	症例検討 期末試験用症例のレポート作成することができる。
15	症例検討 期末試験用症例のレポート作成	症例検討 期末試験用症例のレポート作成することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験		○		100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、理学療法評価に携わってきた。	

科目名	理学療法評価法実習C				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	前期・後期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・治療室
授業概要	臨床実習では対象者に対して適切な評価・治療を実施する必要がある。本授業では客観的臨床能力試験（OSCE）を通じて理学療法に必要な主要な評価・治療方法を学習する。								
一般目標	・各種評価・治療を実施する技術を身につける。								
テキスト 参考書等	なし								

到達目標		
知識（認知領域） ・各種評価・治療の方法について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・各種評価・治療を実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	OSCE概要について 第1回OSCEオリエンテーション	OSCEの概要について説明できる。 第1回OSCEに向けて計画を立てることができる。
2	模倣①医療面接	対象者に医療面接を実施できる。
3	模倣②反射	対象者に反射検査を実施できる。
4	模倣③BRSテスト	対象者にBRSテストを実施できる。
5	模倣④感覚検査	対象者に感覚検査を実施できる。
6	模倣⑤ROM測定	対象者にROM測定を実施できる。
7	まとめ、第1回OSCE事前指導	対象者に評価項目を実施できる。
8	第1回OSCEフィードバック	第1回OSCEの内容を振り返り、課題解決に向けた計画立案ができる。
9	模倣⑥血圧測定	対象者に血圧測定を実施できる。
10	模倣⑦MMT	対象者にMMTを実施できる。
11	模倣⑧形態計測	対象者に形態計測を実施できる。
12	模倣⑨バランス検査	対象者にバランス検査を実施できる。
13	模倣⑩運動療法	対象者に運動療法を実施できる。
14	まとめ、第2回OSCE事前指導	対象者に評価項目を実施できる。
15	第2回OSCEフィードバック	第2回OSCEの内容を振り返り、課題解決に向けた計画立案ができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○	○		100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史、加藤 善範、他		実務経験紹介	医療機関において、理学療法評価を含む理学療法業務に従事(川崎)。	

科目名	日常生活活動実習B				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室／機能訓練室
授業概要	1年次に履修した日常生活活動Bの知識を再確認しながら、各疾患におけるADLについてグループで学修し、発表することでより理解を深めていく。								
一般目標	- 各疾患に特有のADLについて理解する。 - 疾患に適したADLの援助方法が提案できる。 - 各疾患の病態とADL障害、またその支援について習得する。								
テキスト 参考書等	適宜配布する。								

到達目標		
知識(認知領域) ・各疾患に特有のADLについて説明することができる。 ・各疾患の病態とADL障害、またその支援について説明できる。		
技術(精神運動領域) ・疾患に適したADLの援助方法が提案、実践できる。		
態度(情意領域) ・授業に積極的に参加することができる。(周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する) ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	日常生活活動(ADL)介助に関わる支援機	日常生活活動(ADL)介助に関わる支援機器について説明・使用できる。
2	片麻痺のADL(グループワーク)	片麻痺患者のADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
3	片麻痺のADL(グループワーク発表)	片麻痺患者のADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。
4	脊髄損傷のADL(グループワーク)	脊髄患者のADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
5	脊髄損傷のADL(グループワーク発表)	脊髄損傷患者のADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。
6	切断・脳性まひのADL(グループワーク)	切断・脳性まひのADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
7	切断・脳性まひのADL(グループワーク発表)	切断・脳性まひのADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。
8	神経筋疾患のADL(グループワーク)	神経筋疾患患者のADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
9	神経筋疾患のADL(グループワーク発表)	神経筋疾患患者のADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。
10	高齢者のADL(グループワーク)	高齢者のADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
11	高齢者のADL(グループワーク発表)	高齢者のADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。
12	高次脳機能障害のADL(グループワーク)	高次脳機能障害のADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
13	高次脳機能障害のADL(グループワーク発表)	高次脳機能障害のADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。
14	関節リウマチのADL(グループワーク)	関節リウマチのADLについて説明ができ、その支援方法が実施できる。
15	関節リウマチのADL(グループワーク発表)	関節リウマチのADLについて説明ができ、その支援方法についてスライドを用いて発表できる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験				評価なし	優(3):80点以上
小テスト				評価なし	良(2):70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可(1):60点以上
授業態度				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
発表・作品	○	○		100	
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、訪問リハビリなど幅広くADLに携わってきた。	

科目名	義肢装具学実習				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・機能訓練室
授業概要	義肢装具学A/Bで習得した知識を活用し、実際の操作方法や義肢による歩行訓練、装具を用いた運動療法を身に付ける。 義肢装具が必要な疑似症例を通じて、クリニカルクラークシップ形式の臨床実習に必要なポートフォリオの作成方法を習得する。								
一般目標	義肢の歩行練習、装具療法を行う際の各種評価、治療を実施する技術を身につける。								
テキスト 参考書等	義肢装具学テキスト（南江堂）、参考図書：義肢装具のチェックポイント（医学書院）								

到達目標		
知識（認知領域）		
・切断者および装具療法が必要な患者の各種評価、治療の方法について説明できる。 ・必要な義肢、装具に関する情報収集、集約ができる。		
技術（精神運動領域）		
・各種評価、治療を実施できる。 ・義肢装具を正しく扱うことができる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	オリエンテーション、義肢装具学の復習	義肢学の復習を行い、義足のパーツと適応について説明ができる。
2	義肢装具学の復習、切断者について	義足歩行の異常について原因と改善策を説明できる。大腿切断と下腿切断者の模擬ができる。
3	切断者のリハビリテーション①	切断者の評価について講義（30分）、学生同士で切断者の評価が実施できる。（60分）
4	切断者のリハビリテーション②	断端管理法講義（30分）、弾性包帯法・ソフトドレッシングが実施できる、ベッドサイドでの自主トレを
5	義足歩行に関する実習①	対象者に歩行練習前の理学療法を実施することができる。（30分）平行棒内での体重負荷、バランス練習
6	義足歩行に関する実習②	対象者に義足の歩行練習を安全に実施できる。（45分）非切断肢への荷重→義足への荷重と進めることが
7	義足歩行に関する実習③	異常歩行を呈した場合、修正方法を対象者に口頭で説明できる。（30分）歩行練習や筋力トレーニングを実施し修正できる。（60分）
8	義足歩行に関する実習④	日常生活活動・屋内屋内移動・公共交通機関の利用の際の留意点を説明できる。
9	装具療法実習（症例①）	脳卒中片麻痺患者の短下肢装具について説明できる。歩行練習を指導できる。
10	装具療法実習（症例②）	脳卒中片麻痺患者の長下肢装具について説明できる。歩行練習を指導できる。
11	装具療法実習（症例③）	椎体圧迫骨折後の胸腰椎軟性コルセットについて説明できる。ベッドサイドのリハビリを実施できる。
12	装具療法実習（症例④）	変形性膝関節症の装具療法について説明できる。実際に膝装具や足底装具を使用した模擬症例の運動療法
13	臨床実習と装具療法①	切断者の症例に関する文献を集め、ポートフォリオを作成することができる。
14	臨床実習と装具療法②	装具療法が必要な症例に関する文献を集め、ポートフォリオを作成することができる。
15	義肢装具の支給体系、法制度について	義肢装具の支給体系と法制度、必要な手続きについて説明ができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	藤井 昭宏		実務経験紹介	理学療法士として10年間、急性期病院に勤務。義肢および装具のコーディネーターを担当。	

科目名	物理療法実習				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学年	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・治療室
授業概要	物理療法は運動療法と並び理学療法の主要な治療法である。この授業では、2年次に学習した物理療法の基礎知識の理解を深めるとともに、代表的な疾患を5例提示しそれぞれに対する物理療法プログラムの立案方法について学習する。								
一般目標	・物理療法に関する基礎知識に関する知識を修得する。 ・各種疾患に対する物理療法プログラム立案能力を修得する。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 物理療法学テキスト（南江堂） 随時資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域）		
・物理療法に関する基礎知識が説明できる。 ・物理療法の対象となる病態ごとに物理療法プログラムが立案でき、その物理療法の効果が説明できる。		
技術（精神運動領域）		
・なし		
態度（情意領域）		
・積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	物理療法の基礎知識①	・温熱・寒冷療法、エネルギー変換療法に関する基礎知識課題に対し、適切な解答を提示できる。
2	物理療法の基礎知識②	・光線療法、超音波療法に関する基礎知識課題に対し、適切な解答を提示できる。
3	物理療法の基礎知識③	・電気刺激療法、水治療法に関する基礎知識課題に対し、適切な解答を提示できる。
4	関節拘縮に対する物理療法①	・足関節捻挫症例における関節可動域制限の原因を推論することができる。
5	関節拘縮に対する物理療法②	・足関節捻挫症例の関節可動域制限に対する 理学療法プログラムを立案することができる。
6	痙縮に対する物理療法①	・痙縮および各種物理療法による痙縮軽減の生理メカニズムが説明できる。
7	痙縮に対する物理療法②	・脳卒中片麻痺症例の痙縮に対する理学療法プログラムを立案することができる。
8	末梢神経損傷に対する物理療法①	・末梢神経損傷の分類と治療原則について説明できる。 ・末梢神経損傷に対する電気刺激療法の意義について説明できる。
9	末梢神経損傷に対する物理療法②	・腓骨神経麻痺症例に対し、理学療法プログラムを立案できる。
10	軟部組織損傷に対する物理療法①	・軟部組織損傷の修復過程と物理療法の適応について説明できる。 ・腱板断裂の病態と治療原則について説明できる。
11	軟部組織損傷に対する物理療法②	・腱板損傷症例に対し、理学療法プログラムを立案することができる。
12	痛みに対する物理療法①	・痛みの概念と定義について説明できる。 ・痛みに対する物理療法の原則について説明できる。
13	痛みに対する物理療法②	・変形性膝関節症例の痛みに対する理学療法プログラムを立案することができる。
14	総合演習①	・物理療法に関する基礎知識課題に対し、適切な解答を提示できる。
15	総合演習②	・提示された症例の中から一例選択し、理学療法プログラムを立案できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	山本 悟		実務経験紹介	理学療法士として約30年間医療施設に勤務（現在、非常勤勤務）、物理療法実務に携わる。	

科目名	骨関節障害理学療法学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・治療室・パソコン室
授業概要	骨関節障害患者に対しての、病態の捉え方、障害の把握、評価結果の解釈を行い、問題点を抽出し理学療法を立案する、という、理学療法実施までの一連のクリニカルリーズニングを症例検討を行いながらポートフォリオを作成する。同時に自分の考えを明確にし、他者の意見と対峙しながら考えを深めていく。								
一般目標	骨関節障害を有する疾患の障害像の把握と評価結果の解釈、さらに理学療法の立案ができる。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 骨関節障害理学療法学テキスト（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域）		・骨関節障害を有する疾患の障害像の把握と評価結果の解釈、さらに理学療法立案ができる。
技術（精神運動領域）		・なし
態度（情意領域）		・授業に積極的に参加することができる。
回数	授業内容	授業目標
1	関節軟部組織性障害の症例検討①	・症例の情報を見て、病態・障害について把握することができる。
2	関節軟部組織性障害の症例検討②	・症例の評価結果を考察し障害像を捉えることができる。
3	関節軟部組織性障害の症例検討③	・グループ内で意見交換し自己・他者の意見を修正していく中で一症例についてまとめることができる。
4	関節軟部組織性障害の症例検討④	・グループ内で意見交換しながら前期授業等の参考資料をもとに理学療法を立案することができる。
5	関節軟部組織性障害の症例検討⑤	・各グループで症例検討を発表し、他グループの発表を聞き疑問点を列挙し質問することができる。
6	体幹の骨関節障害の症例検討①	・症例の情報を見て、病態・障害について把握することができる。
7	体幹の骨関節障害の症例検討②	・症例の評価結果を考察し障害像を捉えることができる。
8	体幹の骨関節障害の症例検討③	・グループ内で意見交換し自己・他者の意見を修正していく中で一症例についてまとめることができる。
9	体幹の骨関節障害の症例検討④	・グループ内で意見交換しながら前期授業等の参考資料をもとに理学療法を立案することができる。
10	体幹の骨関節障害の症例検討⑤	・各グループで症例検討を発表し、他グループの発表を聞き疑問点を列挙し質問することができる。
11	症例検討、ポートフォリオ作成①	・症例の情報を見て、病態・障害について把握することができる。
12	症例検討、ポートフォリオ作成②	・症例の評価結果を考察し障害像を捉えることができる。
13	症例検討、ポートフォリオ作成③	・グループ内で意見交換し自己・他者の意見を修正していく中で一症例についてまとめることができる。
14	症例検討、ポートフォリオ作成④	・グループ内で意見交換しながら前期授業等の参考資料をもとに理学療法を立案することができる。
15	症例検討、ポートフォリオ作成⑤	・各グループで症例検討を発表し、他グループの発表を聞き疑問点を列挙し質問することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	藤井 昭宏		実務経験紹介	理学療法士として急性期の医療機関に10年間従事、各種運動器疾患に携わってきた。	

科目名	神経障害理学療法学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・治療室・機能訓練室
授業概要	神経障害理学療法の中でも、主に脊髄損傷患者への理学療法、一般的な急性期脳卒中患者の症例検討を学ぶ。実際に脊髄損傷患者を招き、より実的な理学療法を学ぶ。								
一般目標	・各種神経障害に関する一般的な治療法を説明できる。・部位別、疾患別に診断・評価・治療を選択できる。 ・急性期脳卒中患者への理学療法において、適切な検査・測定を選択し、問題点抽出、プログラム立案できる。								
テキスト 参考書等	講師毎に適宜配布する。								

到達目標		
知識(認知領域)		
・授業で取り上げた神経障害理学療法について説明できる。		
技術(精神運動領域)		
・授業で取り上げた神経障害理学療法について実施できる。 ・症例レポートが作成できる。		
態度(情意領域)		
・授業に積極的に参加することができる。(周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する) ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	脊髄損傷の診断と治療(佐々木)	脊髄損傷の基礎を説明できる。 脊髄損傷の易学について説明できる。
2	脊髄損傷の診断と治療(佐々木)	頸髄損傷について病態を説明できる。 頸髄損傷の随伴症状、合併症を説明できる。
3	脊髄損傷のトピックス(佐々木)	脊髄損傷の装具・ロボット歩行について説明できる。
4	脊髄損傷の理学療法評価(佐々木)	胸・腰髄損傷について病態を説明できる。 胸・腰髄損傷について随伴症状、合併症を説明できる。
5	脊髄損傷の理学療法評価(佐々木)	車いすの名称を説明できる。 車いすの処方について説明ができる。
6	急性期の理学療法(佐々木)	脊髄損傷者の急性期の理学療法について説明できる。 随伴症状、合併症への対処法が説明できる。
7	回復期の理学療法(佐々木)	脊髄損傷者の基本動作について、分析でき、説明できる。 脊髄損傷者の動作の真似ができる。
8	脳卒中 急性期のリスク管理①(小田)	・リスク管理の概要について説明できる
9	脳卒中 急性期のリスク管理②(小田)	・病態別のリスクを説明できる ・リスクを予測することができる
10	脳卒中 急性期の評価 (小田)	・一般的な評価項目を説明できる
11	脳卒中 急性期の理学療法①(小田)	・脳画像から病態や症状が予測できる
12	脳卒中 急性期の理学療法②(小田)	・早期離床の進め方について、リスク管理も含め説明できる
13	脳卒中 急性期の理学療法③(小田)	・急性期理学療法のエビデンスについて説明できる
14	脳卒中 急性期の理学療法④(小田)	・pusher症候群、運動失調などに対する理学療法について説明できる
15	脳卒中 急性期の理学療法⑤(小田)	・長下肢装具を使用した歩行介助方法について説明できる

成績評価方法						
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準	
定期試験	○			100	優(3):80点以上	
小テスト				評価なし	良(2):70点以上	
宿題授業外レポート				評価なし	可(1):60点以上	
授業態度				評価なし	不可(0):60点未満 未修得	
発表・作品				評価なし		
演習		○		評価なし		
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数	
担当教員	小田 勇男、佐々木 貴之、他		実務経験紹介	理学療法士として17年間、脊髄損傷の専門病院に勤務(佐々木)		

科目名	内部障害理学療法学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	治療室
授業概要	身体障害者数の1/4を内部障害者が占めており、現在の理学療法において内部障害は主要な分野の1つである。 この授業では理学療法士が関与する呼吸器障害の概要をとらえ、その評価方法と治療技術について学習する。								
一般目標	呼吸器の構造、評価方法に関する知識および技術を修得する。 呼吸リハビリテーションのプログラム立案に関する知識を修得する。								
テキスト 参考書等	ビジュアル実践リハ 呼吸・心臓リハビリテーション（羊土社）								

到達目標		
知識（認知領域） 呼吸リハビリテーションについて説明することができる。		
技術（精神運動領域） 授業で取り上げた呼吸リハビリテーションを実施することができる。		
態度（情意領域） 授業に積極的に参加することができる（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する）。 授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	呼吸リハビリテーションの基礎知識	呼吸器の構造・呼吸のメカニズムについて説明できる。
2	呼吸リハビリテーションの評価①	視診・触診・聴診・打診について説明できる。
3	呼吸リハビリテーションの基礎知識②	呼吸不全の分類と血液ガスについて説明できる。
4	呼吸リハビリテーションの評価②	パルスオキシメータ・スパイロメータを使った評価について説明できる。 視診・触診・聴診・打診が実施できる。
5	包括的呼吸リハビリテーション	包括的呼吸リハビリテーションの目的・効果・注意事項が説明できる。
6	呼吸リハビリテーションの対象疾患	COPD・間質性肺炎・肺炎・気管支喘息について説明できる。
7	呼吸リハビリテーションの評価③	臨床検査所見・異常な呼吸音・肺音について説明できる。
8	呼吸リハビリテーションの評価④	呼吸リハビリテーションの理学療法評価について説明できる。 呼吸リハビリテーションの理学療法評価が実施できる。
9	人工呼吸器管理での呼吸リハビリテーション	人工呼吸器管理での呼吸リハビリテーションが説明できる。
10	排痰法（体位排痰法・ハフニング） ACBT	排痰法（体位排痰法・ハフニング）・ACBTについて説明できる。 排痰法（体位排痰法・ハフニング）・ACBTが実施できる。
11	COPDの呼吸リハビリテーション	COPDの呼吸リハビリテーションについて説明できる。 COPDの呼吸リハビリテーションが実施できる。
12	口すばめ呼吸・横隔膜呼吸 呼吸体操・ADLトレーニング	口すばめ呼吸・横隔膜呼吸・呼吸体操・ADLトレーニングについて説明できる。 口すばめ呼吸・横隔膜呼吸・呼吸体操・ADLトレーニングが実施できる。
13	各疾患の呼吸リハビリテーション 気管吸引・在宅酸素療法	各疾患の呼吸リハビリテーション・気管吸引・在宅酸素療法について説明できる。 各疾患の呼吸リハビリテーションが実施できる。
14	徒手の呼吸介助手技 胸郭可動域練習	徒手の呼吸介助手技・胸郭可動域練習について説明できる。 徒手の呼吸介助手技・胸郭可動域練習が実施できる。
15	総合演習	呼吸器の構造、評価方法について説明できる。 呼吸リハビリテーションのプログラムを立案できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（３）：８０点以上 良（２）：７０点以上 可（１）：６０点以上 不可（０）：６０点未満 未修得 （　）内はＧＰＡ点数
小テスト				評価なし	
宿題授業外レポート				評価なし	
授業態度			○	評価なし	
発表・作品			○	評価なし	
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	
担当教員	伊藤　惇		実務経験紹介	理学療法士として約10年以上、総合病院・クリニックに勤務。	

科目名	スポーツ理学療法学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室
授業概要	スポーツ障害から運動機能を改善させ、競技レベルを向上させることができるスキルを身につけることができる内容を学習する。この授業では特に障がい者スポーツに着目し、競技動作と障害発生の原因となる動作を分析するとともに、障がい者スポーツ競技者に対する指導法について学習を深める。								
一般目標	・障がい者スポーツ対象者の病態に関する知識を修得する。 ・障がい者スポーツ競技に起こりうるスポーツ障害に関する知識を修得する。 ・障がい者スポーツを指導するにあたり必要な知識を修得する。								
テキスト 参考書等	なし								

到達目標		
知識（認知領域）		
・障がい者スポーツ対象者の病態およびスポーツ障害について説明できる。		
技術（精神運動領域）		
・障がい者スポーツ競技について、対象者に競技指導および模倣ができる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	障がい者スポーツの意義と理念	障害者にとってのスポーツの意義と理念を理解することができる。
2	全国障害者スポーツ大会の概要	全国障がい者スポーツ大会の基本理念などを通して地域のスポーツ振興を進める役割について理解すること
3	障がい者スポーツ推進の取り組み	地域の障がい者スポーツ振興の現状について理解することができる。
4	障がい者スポーツに関する諸施策	障がい者福祉施策および障がい者スポーツに関する施策について学ぶ
5	障がいのある人との交流（きらりん	障がい者との交流ができる。
6	障がいのある人との交流（きらりん	障がい者との交流ができる。
7	障がいのある人との交流（きらりん	障がい者との交流ができる。
8	障がいのある人との交流（きらりん	障がい者との交流ができる。
9	各障がいの理解（身体障がい）	スポーツをする上での身体障害（肢体不自由、視覚・聴覚・内部障害）について説明できる。
10	各障がいの理解（身体障がい）	スポーツをする上での身体障害（肢体不自由、視覚・聴覚・内部障害）について説明できる。
11	各障がいの理解（知的障がい）	スポーツをする上での知的障害について説明できる。
12	各障がいの理解（精神障がい）	スポーツをする上での精神障害について説明できる。
13	スポーツのインテグリティと指導者に 求	スポーツにおけるインテグリティを理解し、プレイヤーズファーストの視点やプレイヤーと共に学び続ける姿勢について理解することができる。
14	各障がいのスポーツ指導上の留意点	対象者が障がい者スポーツを実施するために必要な説明と支援ができる。
15	各障がいのスポーツ指導上の留意点	対象者が障がい者スポーツを実施するために必要な説明と支援ができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法業務の中で、障がい者スポーツに携わる経験あり。	

科目名	骨関節障害理学療法実習A				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	治療室
授業概要	理学療法を実施する上で、関節可動域制限、軟部組織由来の疼痛は問題点として挙がることが多い。この授業では、関節可動域制限の改善、痛み軽減を目的とした疼痛抑制法、ストレッチング法の理論と実技について学習する。PNFとは固有受容性神経筋促通法と訳され、主に固有受容器を刺激することにより神経と筋の働きを促進および抑制する手技である。この授業ではPNFの概略、根拠となる神経生理学、主なストレッチングの種類と特徴を理解し、治療に必要な解剖学、神経生理学の知識を習得する。疼痛抑制法とIDストレッチングの技術を習得する。								
一般目標	PNFの概略、関連する知識を習得する。PNFの主な手技を習得する。								
テキスト	IDストレッチング（三輪書店）								
参考書等	PNFマニュアル（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域） ストレッチの種類と特徴を理解し、治療に必要な解剖学、神経生理学について説明できる。 授業で取り上げたPNFの関連知識を説明できる。授業で取り上げたPNFの手技について説明できる。		
技術（精神運動領域） 疼痛抑制法、IDストレッチングの基本的な手技が実践できる。 授業で取り上げたPNFの主な手技を行える。		
態度（情意領域） 積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	IDストレッチング概論①（宮野）	・ストレッチングの種類と特徴を説明できる。 ・IDストレッチングについて説明できる。
2	IDストレッチングのための基礎知識①（宮野）	・IDストレッチングのために必要な解剖学、神経生理学について説明できる。
3	IDストレッチングのための基礎知識②（宮野）	・IDストレッチングの方法、施行時の注意点を説明できる。
4	IDストレッチングの実践（評価・疼痛抑制）（宮野）	・評価、治療の流れを理解している。疼痛抑制法を実施できる。
5	IDストレッチングの実践（体幹）（宮野）	・注意点に留意し、筋走行をイメージしながらIDストレッチングを実施できる。
6	IDストレッチングの実践（上肢・下肢）（宮野）	・筋緊張に応じた方法を選択し、IDストレッチングを実施できる。
7	PNFの概要・定義・治療管理（道祖）	・PNFの概要、定義について説明できる。 ・PNFの適応、禁忌について説明できる。
8	促通要素（道祖）	・固有受容器について説明できる。 ・促通の要素について、促通される機能と関連する研究について説明できる。
9	PNFで用いられる基本手技①（道祖）	・上肢のPNF運動パターンを行える。
10	PNFで用いられる基本手技②（道祖）	・肩甲骨のPNF運動パターンを行える。 ・下肢のPNF運動パターンを行える。
11	PNFで用いられる基本手技③（道祖）	・骨盤のPNF運動パターンを行える。
12	PNFで用いられる基本手技④（道祖）	・体幹のPNF運動パターンを行える。
13	特殊テクニック、評価とプログラム立案（道祖）	・特殊テクニックについて目的と方法を説明できる。 ・特殊テクニックを行える。
14	PNFの臨床応用（道祖）	・PNFの運動パターンを用いて基本動作の促通を行える。 ・PNFの運動パターンを用いて歩行の促通を行える。
15	疾患別PNF（道祖）	・脳卒中片麻痺に対してPNFを適応できる。 ・膝OAに対してPNFを適応できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	道祖 悟史、宮野 清孝		実務経験紹介	理学療法士として約25年間、総合病院（急性期）に勤務（宮野）	

科目名	骨関節障害理学療法学実習B				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	機能訓練室・治療室
授業概要	骨関節障害は整形外科疾患として理学療法の対象となる機会の多い障害である。本授業では、理学療法の対象となることが多い整形外科疾患における病態・理学療法評価・運動療法について、講義・グループワーク・実技を通じて学習する。								
一般目標	・各種整形外科疾患の病態・理学療法評価・運動療法の概要について知識を修得する。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 骨関節障害理学療法学テキスト（南江堂） / その他、必要に応じて資料を配布する								

到達目標		
知識（認知領域） ・授業で取り上げた整形外科的疾患の病態・理学療法評価および運動療法について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・授業で取り上げた整形外科的疾患の理学療法評価・運動療法を実践（模倣）できる。		
態度（情意領域） ・積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	大腿骨近位部骨折について（講義）	・大腿骨頸部骨折・大腿骨転子部骨折の違いについて説明できる。 ・大腿骨頸部骨折例・大腿骨転子部骨折例に対する手術療法について説明できる。 ・大腿骨頸部骨折例・大腿骨転子部骨折例に生じやすい機能障害について説明できる。
2	大腿骨近位部骨折の評価と治療について（講義・グループワーク）	・大腿骨頸部骨折例・大腿骨転子部骨折例の理学療法評価について説明できる。 ・大腿骨頸部骨折例・大腿骨転子部骨折例における検査・測定結果のアセスメントの流れを説明できる。
3	大腿骨近位部骨折の評価と治療について（実技・小テスト）	・大腿骨頸部骨折例・大腿骨転子部骨折例に対する理学療法評価および運動療法を実践（模倣）できる。
4	変形性股関節症について（講義）	・変形性股関節症の病態を股関節における臼蓋被覆の観点から説明できる。 ・変形性股関節症例に生じやすい機能障害について説明できる。 ・変形性股関節症例に生じやすい歩行障害（Trendelenburg sign・Duchenne sign）について説明できる。
5	変形性股関節症の評価と治療について（講義・グループワーク）	・変形性股関節症例の理学療法評価について説明できる。 ・変形性股関節症例における検査・測定結果のアセスメントの流れを説明できる。
6	変形性股関節症の評価と治療について（実技・小テスト）	・変形性股関節症例に対する理学療法評価および運動療法を実践（模倣）できる。
7	人工股関節全置換術について（講義）	・人工股関節全置換術のアプローチと脱臼について説明できる。 ・人工股関節全置換術後に生じやすい機能障害について説明できる。
8	人工股関節全置換術の評価と治療について（講義・グループワーク）	・人工股関節全置換術後の理学療法評価について説明できる。 ・人工股関節全置換術後における検査・測定結果のアセスメントの流れを説明できる。
9	人工股関節全置換術の評価と治療について（実技・小テスト）	・人工股関節全置換術に対する理学療法評価および運動療法を実践（模倣）できる。 ・人工股関節全置換術後の脱臼部位に留意した日常生活動作指導を実践（模倣）できる。
10	変形性膝関節症について（講義）	・変形性膝関節症の病態について説明できる。 ・変形性膝関節症に生じやすい機能障害について説明できる。 ・変形性膝関節症に生じやすい歩行障害（lateral thrust・stiff knee gait・Duchenne
11	変形性膝関節症の評価と治療について（講義・グループワーク）	・変形性膝関節症の理学療法評価について説明できる。 ・変形性膝関節症における検査・測定結果のアセスメントの流れを説明できる。
12	変形性膝関節症の評価と治療について（実技・小テスト）	・変形性膝関節症に対する理学療法評価および運動療法を実践（模倣）できる。
13	人工膝関節全置換術について（講義）	・人工膝関節全置換術で用いられるインプラント（CR・PS）、関節侵入法の特徴について説明できる。 ・人工膝関節全置換術後に生じやすい機能障害について説明できる。
14	人工膝関節全置換術の評価と治療について（講義・グループワーク）	・人工膝関節全置換術後の理学療法評価について説明できる。 ・人工膝関節全置換術後における検査・測定結果のアセスメントの流れを説明できる。
15	人工膝関節全置換術の評価と治療について（実技・小テスト）	・人工膝関節全置換術に対する理学療法評価および運動療法を実践（模倣）できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川端 悠士		実務経験紹介	理学療法士として16年間、整形外科関連医療施設に勤務	

科目名	神経障害理学療法学実習A				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	治療室・機能訓練室
授業概要	神経系疾患に関する理学療法を、実習A・実習Bと分けて行う。脳卒中、小児、脊髄損傷など、これまで学習してきた神経理学療法について、より臨床に向けた知識や技術の整理を行う。 講義担当は臨床の第一線で活躍されている理学療法士の先生方であり、最新の知見や臨床における思考過程を学ぶことができる。								
一般目標	・脳卒中に関する一般的な治療法を説明できる。								
テキスト 参考書等	脳卒中理学療法の理論と技術 メジカルビュー社（穴戸分） その他の講師分は適宜、資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域） ・脳卒中者の診断・評価・運動療法について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・装具、電気治療機器の必要性、操作方法を獲得する。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	脳卒中の運動療法（回復期）（穴戸）	・脳卒中者の寝返り・起き上がりについて理解する
2	脳卒中の運動療法（回復期）（穴戸）	・脳卒中者の歩行について理解する
3	脳卒中の運動療法（生活期）（穴戸）	・脳卒中者の生活期リハビリについて理解する
4	脳卒中の装具療法（穴戸）	・長下肢装具、短下肢装具の必要性を理解する
5	脳卒中の物理療法（穴戸）	・電気治療機器の必要性を理解する
6	脳卒中の物理療法（穴戸）	・電気治療機器の必要性を理解する
7	高次脳機能障害（穴戸）	・高次脳機能障害について理解する
8	OT・STによるリハビリテーション	・ADL障害、嚥下障害、失語症について理解する
9	その他のリハビリテーション（穴戸）	・様々なリハビリテーションを把握する
10	脳卒中者へのリハビリテーション（小田）	・まとめとしてトータルのリハビリを理解する
11	脳卒中 急性期のリスク管理①（小田）	・リスク管理の概要について説明できる
12	脳卒中 急性期のリスク管理②（小田）	・病態別のリスクを説明できる ・リスクを予測することができる
13	脳卒中 急性期の評価（小田）	・一般的な評価項目を説明できる ・脳画像から病態や症状が予測できる
14	脳卒中 急性期の理学療法①（小田）	・早期離床の進め方について、リスク管理も含め説明できる ・急性期理学療法のエビデンスについて説明できる
15	脳卒中 急性期の理学療法②（小田）	・pusher症候群、運動失調などに対する理学療法について説明できる ・長下肢装具を使用した歩行介助方法について説明できる

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	穴戸 健一郎、小田 勇男		実務経験紹介	理学療法士として13年間、急性期病院に勤務し、主に脳卒中と整形を担当する（小田）	

科目名	神経障害理学療法学実習B				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	治療室・機能訓練室
授業概要	神経系疾患に関する理学療法を、実習A・実習Bと分けて行う。脳卒中、小児、脊髄損傷など、これまで学習してきた神経理学療法について、より臨床に向けた知識や技術の整理を行う。 講義担当は臨床の第一線で活躍されている理学療法士の先生方であり、最新の知見や臨床における思考過程を学ぶ。								
一般目標	・小児疾患・障害に対する運動療法を選択し、その意義を説明できる。 ・脊髄損傷患者様に適切な評価を選択し、その模倣と実施ができる。								
テキスト 参考書等	その他の講師分は適宜、資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域） 小児、脊髄損傷に関する理学療法の意義、目的、方法について説明できる。		
技術（精神運動領域） 脊髄損傷患者様に適切な評価を選択し、その模倣と実施ができる。		
態度（情意領域） 積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	小児領域における理学療法（一色）	ポジション（仰臥位）の意味を理解し、起き上がり等のアプローチを説明できる。
2	小児領域における理学療法（一色）	ポジション（腹臥位）の意味を理解し、寝返り等のアプローチを説明できる。
3	小児領域における理学療法（一色）	ポジション（座位）の意味を理解し、体幹の抗重力伸展のアプローチを説明できる。
4	小児領域における理学療法（一色）	ポジション（立位）の意味を理解し、基底面と重心の関係を説明できる。
5	小児領域における理学療法（一色）	歩行のアプローチをや姿勢反射や反応を説明できる。
6	小児領域における理学療法（一色）	これまで学習した知識・技術を整理し、説明することができる。
7	脊髄損傷の評価前注意事項(古賀)	脊髄損傷者の評価項目を説明できる。 脊髄損傷者の評価項目の選定ができる。
8	脊髄損傷の評価前注意事項(古賀)	脊髄損傷者に対する評価方法を説明できる。
9	脊髄損傷の評価前注意事項(古賀)	頸髄損傷者の病態を把握し、評価時の注意点を説明できる。
10	脊髄損傷の評価前注意事項(古賀)	胸・腰髄損傷者の評価時の注意点を説明できる。
11	脊髄損傷患者様の評価（古賀）	実際の脊髄損傷患者で評価のための説明ができる。
12	脊髄損傷患者様の評価（古賀）	実際の脊髄損傷患者で評価ができる。 評価時の代償動作について説明できる。
13	脊髄損傷患者様の評価（古賀）	実際の脊髄損傷患者の動作を観察し、分析することができる。
14	脊髄損傷患者様の評価（古賀）	実際の脊髄損傷患者で評価を行い、統合と解釈ができる。
15	神経障害理学療法学のとめ（藤井）	これまで学習した知識・技術を整理し、説明することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	一色 一美、古賀 隆一郎、他		実務経験紹介	約30年間小児を中心に理学療法を行う(一色)	

科目名	内部障害理学療法学実習A				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	P T 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	治療室・機能訓練室
授業概要	内部障害に対する理学療法の実際について実技を中心に学ぶ。1～4回までは、がん関連障害を引き起こす主な疾患の病因、病態生理、症候、診断と治療、および緩和ケア・終末期における理学療法士の役割を学ぶ。5～15では、運動による身体の生理的な変化について実習し、呼吸ガス装置を用いた運動負荷試験や理学療法の運動処方などについて学ぶ。								
一般目標	・活動（運動）を継続する上で必要となる運動耐容能について、呼吸の変化・循環の変換・代謝の変化を説明できる。 ・がんのリハビリテーションにおける理学療法を説明できる。 ・緩和ケア・終末期医療における理学療法を説明できる。								
テキスト 参考書等	理学療法士のための運動処方マニュアル（文光堂） その他、必要に応じて資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域）		
・運動時のエネルギー代謝や循環応答について説明できる。 ・運動処方に関連する専門用語を説明できる。 ・運動負荷試験の具体的手順や方法、留意点を説明できる。 ・運動療法のガイドラインを説明できる。 ・がんの疫学、予後、病因、症候、障害を説明できる。 ・がん関連のリハビリテーション（精神運動領域） ・エネルギー消費量を算出できる。 ・Karvonenの式を用いて目標心拍数および運動強度（%VO₂max）を算出できる。 ・運動負荷試験の結果を読み取り、減量を目的とした運動処方が行える。 ・がん患者の症例について、問題点の抽出とプログラムの立案ができる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	がんの治療について（島本）	・がんの疫学・病理学と一般的ながんの治療について説明できる。
2	周術期・回復期・終末期のがんのリハビリテーション（島本）	・周術期・回復期・終末期のがんのリハビリテーションについて説明できる。
3	症例検討（がんリハ）（島本）	・がん患者の症例について問題点の抽出とプログラムの立案ができる。
4	国家試験対策（島本）	・国家試験問題を理解し解答することができる。
5	運動時の生体反応①（曽根）	・運動時のエネルギー代謝について説明できる。 ・運動時の呼吸応答ならびに酸素動態について説明できる。
6	運動時の生体反応②（曽根）	・運動時の循環応答について説明できる。
7	運動時の生体反応③（曽根）	・換気閾値、乳酸閾値について説明できる。 ・運動時の内分泌応答について説明できる。
8	運動負荷試験実習（曽根）	・実習を通して、呼吸ガス分析を含めた運動負荷試験実施のための具体的手順・方法や留意点について理解し、説明できる。
9	運動処方作成のための基礎理論①（丹）	・運動処方の具体的条件（運動種目、強度、時間および頻度）について説明できる。 ・運動強度を表す具体的指標（物理的、生理的ならびに主観的な指標）について説明できる。
10	運動処方作成のための基礎理論②（丹）	・内科的疾患に対する運動療法のガイドラインについて説明できる。 ・減量プログラム作成につながるエネルギー計算（運動による消費エネルギーの計算を含む）を行うことができる。
11	運動負荷試験の結果に基づいた運動処方（運動プログラム）作成の実践①（丹）	・マイクロソフトエクセルを用いて運動負荷試験の結果（物理的仕事率、酸素摂取量、心拍数、血圧、主観的運動強度）を基にした運動処方（運動プログラム）を作成できる。
12	運動負荷試験の結果に基づいた運動処方（運動プログラム）作成の実践②（丹）	・マイクロソフトエクセルを用いて運動負荷試験の結果（物理的仕事率、心拍数、血圧、主観的運動強度）を基にした運動処方（運動プログラム）を作成できる。
13	【演習問題】エネルギー消費量（川崎）	・呼吸商や酸素摂取量、嫌気性代謝閾値、呼吸性代謝開始点などの専門用語を説明できる。 ・エネルギー消費量を算出できる。
14	【演習問題】運動処方・CPX（川崎）	・Karvonenの式を用いて目標心拍数および運動強度（%VO₂max）を算出できる。 ・運動負荷試験の結果を読み取り、運動処方を作成できる。
15	【学修到達度確認】エネルギー消費量、運動処方・CPX（川崎）	・エネルギー消費量、運動処方・CPXに関連する国試水準の多肢選択問題について、正解・不正解の理由を説明できる。

成績評価方法				
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合
定期試験	○			100
小テスト				評価なし
宿題授業外レポート				評価なし
授業態度				評価なし
発表・作品				評価なし
演習				評価なし
出席			○	欠格条件
担当教員	丹 信介、曽根 涼、他		実務経験紹介	大学教員として20年間、健康運動処方論の講義と演習(丹)、運動生理学の講義と実習(曽根)をそれぞれ担当。

() 内はG P A点数

科目名	内部障害理学療法学実習B				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	P T 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	302教室・治療室・機能訓練室
授業概要	内部障害に対する理学療法の実践について実技を中心に学ぶ。ここでは主に糖尿病と腎機能障害の理学療法について学ぶ。 医療従事者としての感染予防リスクマネジメント、ストレスマネジメントができる。理学療法士として内部障害患者に対して、喀痰・吸引ができる。								
一般目標	- 代表的な内部疾患の病態・評価及び治療について説明できる。 - 代表的な内部障害に対する治療プログラム（健康増進プログラム）が立案できる。 - 医療従事者として、感染予防、ストレスマネジメント、吸引ができる。								
テキスト 参考書等	その他、必要に応じて資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域） ・授業で取り上げた内部障害理学療法について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・授業で取り上げた内部障害理学療法について実施できる。 ・吸引ができる。・健康増進の企画、運営ができる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	肥満・メタボリックシンドロームに関わる評価・測定（溝口）	肥満・メタボリックシンドロームに関わる評価が説明できる。
2	糖尿病の運動療法・運動の種類と強度（溝口）	糖尿病の運動療法の種類と強度について説明できる。
3	糖尿病の運動療法・運動指導上の注意点（溝口）	運動指導上の注意点、リスク管理について説明できる。
4	糖尿病の運動療法・患者教育と療養指導（溝口）	患者教育と療養指導について説明できる。
5	腎障害の運動療法・運動の種類と強度（福田）	腎障害の基礎知識を学び、運動療法や運動の種類・強度の設定ができる。
6	腎障害の運動療法・注意点・患者教育と指導（福田）	腎障害患者の精神面への理解・配慮ができ、患者指導や運動への注意点の説明ができる。
7	病棟におけるリスクマネジメント（山下）	病棟におけるリスクマネジメントについてを理解することができる。
8	レジリエンス・ストレスコーピング	臨床実習に赴くための心構えができる。
9	救命救急法（加藤） （日本赤十字基礎講習）	救命救急法について理解し実施することができる。
10	救命救急法（加藤） （日本赤十字基礎講習）	救命救急法について理解し実施することができる。
11	感染予防（山下）	感染予防について理解し実施することができる。
12	喀痰吸引法（濱本・看護学科教員）	喀痰吸引法について理解し実施することができる。
13	喀痰吸引法（濱本・看護学科教員）	喀痰吸引法について理解し実施することができる。
14	健康増進（石丸）	チャレンジデーの計画、実施
15	健康増進（石丸）	チャレンジデーの計画、実施

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	溝口 桂、福田 圭祐、他		実務経験紹介	7年間の透析医療現場を経て、通所介護施設に勤務（福田）	

科目名	スポーツ理学療法学実習				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	治療室
授業概要	スポーツ障害から運動機能の改善を目指し、競技レベルの向上、スキルを身につけることができる内容を学習する。この授業では競技動作と障害発生の原因となる動作を分析するとともに、障害特性に応じた指導法について学習を深める。								
一般目標	・スポーツ障害の病態に関する知識を習得する。 ・各種競技に起こりうるスポーツ障害の評価方法、治療方法に関する知識を習得する。 ・スポーツを指導するにあたり必要な知識および技術を習得する。								
テキスト 参考書等	アスレティックリハビリテーションガイド（文光堂） スポーツ理学療法学 改訂第2版（メジカルビュー）								

到達目標		
知識（認知領域） ・スポーツ障害（疾患別および競技別）の特性について理解し、説明できる。 ・スポーツ障害の予防、救急処置、およびコンディショニング（テーピングを含む）について理解し、実施できる。		
技術（精神運動領域） なし		
態度（情意領域） 積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	スポーツ障害と理学療法	・スポーツ医療における理学療法士の役割を説明できる ・アスレティックトレーナーの役割を説明できる
2	疾患別スポーツ障害①	・スポーツ外傷、障害の違いについて説明できる ・上肢のスポーツ障害について説明できる
3	疾患別スポーツ障害②	・下肢のスポーツ障害について説明できる
4	競技別スポーツ障害①	・競技種目特性（動作、体力）を理解できる ・競技別スポーツ（球技）特性を理解できる
5	競技別スポーツ障害②	・競技別スポーツ（球技以外）特性を理解できる
6	スポーツ動作分析①	・スポーツの基本的な動作を理解し、問題点や改善点を把握し、説明できるようになる
7	スポーツ動作分析②	・スポーツの基本的な動作を理解し、問題点や改善点を把握し、説明できるようになる
8	コンディショニングと外傷予防	・様々なコンディショニングの知識を身につけ、実践できる
9	救急処置	・救急処置の基本的な知識を身につけ、実践できる
10	テーピング実技 総論・足関節①	・テーピングの基本的な知識を理解できる ・足関節のテーピングが実践できる
11	テーピング実技 足関節②・足部	・足関節のテーピングが実践できる ・足部のテーピングが実践できる
12	テーピング実技 膝関節①	・膝関節のテーピングが実践できる
13	テーピング実技 膝関節②	・膝関節のテーピングが実践できる
14	テーピング実技 肩関節	・肩関節のテーピングが実践できる
15	テーピング実技 肘関節	・肘関節のテーピングが実践できる

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	上條 寛司		実務経験紹介	整形外科病院やスポーツ現場でスポーツ選手に対して、治療や帯同経験がある	

科目名	地域理学療法学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	302教室
授業概要	これまでに修得した社会福祉学、日常生活活動学や地域リハビリテーション学の知識や技術を基盤とし、地域包括ケアシステムの下、実生活の場で対象者支援を行うために必要な基本的知識を修得する。講義では関連制度や関連法規をはじめ、地域福祉や多職種連携などの地域における理学療法士や関連職種の役割や範囲について幅広く取り扱う。また地域実習を視野に、								
一般目標	・地域理学療法法の活動内容を知り、介護保険領域や介護予防分野での理学療法法の意義、目的、内容に関する知識を修得する。 ・地域理学療法法における臨床実習に備え、地域包括ケアシステム（特に、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション）における理学療法士の役割を理解し、地域包括								
テキスト 参考書等	テキスト：地域リハビリテーション学（羊土社）、その他、必要に応じ資料を配布する。 参考資料：最新理学療法学講座（医歯薬出版株式会社）、予防理学療法学要論（医歯薬出版株式会社）、栄養科学イラストレイテッド運動生理学（羊土社）								

到達目標		
知識（認知領域） ・地域包括ケアシステムの下、対象者支援に必要な基本的知識（地域理学療法における理学療法士の領域、関連職種、法・制度、サービス）について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・症例に応じて情報を整理し、公的サービスの導入案を検討することができる。 ・症例に応じて目的・目標、主な介入方針を検討することができる。		
態度（情意領域） 授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する）		
回数	授業内容	授業目標
1	地域リハビリテーションの定義、範囲、対象（川崎）	・地域リハビリテーションの定義を説明できる。 ・地域リハビリテーションの範囲、対象を説明できる。
2	地域福祉と地域福祉計画（川崎）	・地域福祉の定義を説明できる。 ・地域福祉計画から地域課題やニーズ、取り組みを調査し、理学療法士の立場から課題解決方法を立案することができる。
3	地域における理学療法士と多職種連携（川崎）	・地域理学療法法の定義や概要、および地域における理学療法士の役割を説明できる。 ・地域リハビリテーションに関わる職種を説明できる。
4	関連制度と関連法規①（医療保険制度）（川崎）	・医療保険制度の目的や国民皆保険制度の意義を説明できる。 ・医療費の自己負担割合や疾患別リハビリテーションについて説明できる。
5	関連制度と関連法規②（介護保険制度）（川崎）	・介護保険制度の理念と仕組み、被保険者と費用負担について説明できる。 ・要介護認定の流れを説明できる。
6	介護保険サービス（川崎）	・介護保険サービスの種類や流れを説明できる。 ・地域密着型サービスや日常生活支援総合事業を説明できる。
7	訪問リハビリテーションにおける理学療法①（川崎）	・訪問リハビリテーションの特殊性と目標設定を説明できる。 ・利用者宅で測定可能な臨床評価を列挙し説明できる。 ・訪問理学療法の実習において求められることを説明できる。
8	訪問リハビリテーションにおける理学療法②（川崎）	・症例情報をICFを用いて整理できる。 ・症例に対する理学療法および他の医療従事者の業務内容を説明できる。 ・症例に関する保険制度およびサービス内容の特徴を説明できる。
9	通所系サービスにおける理学療法①（川崎）	・通所リハビリテーションと通所介護の概要を説明できる。 ・通所リハビリテーションと通所介護における理学療法士の役割を説明できる。 ・通所系サービスの実習で求められることを説明できる。
10	通所系サービスにおける理学療法②（川崎）	・症例情報をICFを用いて整理できる。 ・症例に対する理学療法および他の医療従事者の業務内容を説明できる。 ・症例に関する保険制度およびサービス内容の特徴を説明できる。
11	入所系サービスにおける理学療法①（川崎）	・入所系サービスの位置づけと高齢者が住まう主な施設、または住居で提供されるサービスを説明できる。 ・介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅における理学療法を説明できる。
12	入所系サービスにおける理学療法②（川崎）	・症例情報をICFを用いて整理できる。 ・症例に対する理学療法および他の医療従事者の業務内容を説明できる。 ・症例に関する保険制度およびサービス内容の特徴を説明できる。
13	地域実習に向けた自己課題の整理	・地域実習の目的を説明できる。 ・地域実習に向けた自己課題を整理できる。 ・地域実習までに行うべき準備項目および内容を挙げ、課題解決に向けた方策を検討できる。
14	生活機能の視点 生活行為向上マネジメントとは（渡辺）	生活行為向上マネジメントについて説明できる。
15	生活行為向上マネジメントとは（演習） （渡辺）	生活行為向上マネジメントの実施方法について説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品 演習				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史、渡辺 慎介		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、介護予防事業や健康増進事業等に携わってきた(川崎)	

科目名	地域理学療法学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	302教室
授業概要	我が国が直面している最大の課題は少子高齢化・人口減少への課題である。社会構造の変化に伴い地域理学療法の在り方が問われる中、本講では、関連サービスを中心として生活機能改善の可能性やリハビリテーションの技術・地域理学療法学について学習する。								
一般目標	地域理学療法の関連サービスでの理学療法士の役割について説明できる								
テキスト 参考書等	地域リハビリテーション学（羊土社）								

到達目標		
知識（認知領域） ①地域理学療法の活動内容を知り、介護保険領域や介護予防分野での理学療法の意義、目的、内容を説明できる。 ②地域理学療法に必要な課題分析の方法を学び、ICPを活用しながらニーズ把握を行い、サービス内容の立案やプログラムにつなぐことができる。		
技術（精神運動領域） なし		
態度（情意領域） 授業に積極的に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	訪問リハビリテーション①概要（杉山）	訪問リハビリテーション目的を説明することができる。理学療法士の役割を説明することができる。訪問リハビリテーションにおいて医療・介護との連携について説明することができる。
2	訪問リハビリテーション②事例紹介	必要な知識・技術について知ることができる。 訪問リハビリテーション計画において、目標設定や活動と参加について知ることができる。
3	訪問リハビリテーション③事例検討	利用様の在宅生活におけるリスク管理を説明することができる。
4	訪問リハビリテーション④ケアプラン作成（杉山）	訪問リハビリテーション計画の立案および他の事業所との関連性について説明することができる。
5	通所リハビリテーション①概要（三浦）	サービスの種類について知ることができる。理学療法士の役割を説明することができる。 通所系サービスの機能と役割について説明することができる。通所リハビリテーションと通所介護の違いを説明できる。
6	通所リハビリテーション②事例紹介	必要な知識・技術について知ることができる。 訪問調査におけるポイントを説明できる。ゴール設定や活動と参加について知ることができる。
7	通所リハビリテーション③事例検討	利用者様の情報から、在宅生活における危険予知を考えることができる。
8	通所リハビリテーション④ケアプラン作成（三浦）	必要なサービスやリハビリテーション計画を考えることができる。
9	介護予防事業・転倒予防①地域包括ケアシステムにおける介護予防の考え方（綿谷）	・地域包括ケアシステム構築の背景と介護予防、日常生活支援総合事業の概要を説明できる
10	介護予防事業・転倒予防②通いの場のマネジメント（綿谷）	・通いの場支援の意義と体操指導を踏まえたマネジメントについて説明できる
11	介護予防事業・転倒予防③地域ケア会議の概要（綿谷）	・介護予防地域ケア会議の意義と理学療法士に求められる役割について説明できる
12	介護予防事業・転倒予防④地域ケア模擬会議の実施（綿谷）	・介護予防地域ケア会議において自立支援に資する助言を行うことができる
13	事例検討①（小村）	・在宅復帰に向けた患者様の情報を整理し、問題点を列挙することができる
14	事例検討②（小村）	・必要なサービスを選択し、理学療法士として関わる場合の目標を立てることができる
15	事例検討③（小村）	・QOL向上のために必要なプランを立てることができる

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	優（3）：80点以上
小テスト				評価なし	良（2）：70点以上
宿題授業外レポート				評価なし	可（1）：60点以上
授業態度				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
発表・作品				評価なし	
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	杉山 英樹、綿谷 昌明、他		実務経験紹介	理学療法士として19年間訪問リハビリを実施し、現在、訪問リハビリ事業所管理者（杉山）	

科目名	臨床実習Ⅱ				単位数	3	時間数	135	
授業形態	実習	対象学生	P T 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	なし
授業概要	評価実習では、診療録等からの間接的情報収集や対象者への直接的情報収集（検査・測定等）を通じて、対象者の状態等に関する評価・治療を学ぶ。様々な疾患・状態の対象者に対して、見学・協同参加・実施のステップを踏み、基本的な検査・測定等を適切に実施することを学ぶ。さらに、得られた情報から臨床像を考え、課題解決に向けた仮説を立てる過程を学ぶ。								
一般目標	・対象者を尊重し、共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築できる。 ・理学療法の流れを理解するとともに、臨床内容の意義を理解して説明をすることができる。 ・指導者の直接監視下で学生により実施されるべき項目（水準Ⅰ）において、1)リスク管理、2)理学療法評価、3)理学療法治療技術を実践す								
テキスト 参考書等	3年次臨床実習Ⅱガイドブック、臨床実習教育の手引き 第6版（日本理学療法士協会、 https://www.jpapnt.or.jp/activity/books/education_01/ ）								

到達目標		
知識（認知領域） ・3年次までに履修した専門基礎科目・専門科目の知識について、想起（記憶している）～解釈（理解している）～問題解決（解決策につなげる）レベルで説明できる。		
技術（精神運動領域） ・臨床実習のチェックリストにある「理学療法に関する情報収集・検査測定項目」について、可能な限りその多くを実施レベル以上となるよう反復練習（情意領域） ・挨拶・服装・身だしなみに留意して臨むことができる。 ・報告・連絡・相談を適宜行うことができる。 ・守秘義務の徹底することができる。 ・個人情報取扱いに細心の注意を払える。		
時間数	授業内容	授業目標
40時間×3週	評価実習 実習前の取り組み ①ワクチン接種状況確認 ②実習前相談 ③感染対策 ④学修到達確認 ⑤実習関連書類の作成 ・実習生プロフィール ・総括的評価およびコメント ・車両持込許可願（該当者） ・部外宿舎入居誓約書（該当者） ・食事申込書（該当者） ・個人情報保護に関する誓約書 ・出席簿 実習中の課題 ①臨床体験・診療参加 ②臨床実習チェックリスト ③臨床実習ポートフォリオ ・ディリーノート ・臨床経験気づきリスト ・文献収集 ・勉強会や研修会資料 実習後の取り組み ①実習関連書類の提出 ②実習後指導 ③凝縮ポートフォリオ作成 ④実技確認 ⑤情意面確認 ⑥口頭試問	・対象者を尊重し、共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築できる。 ① 清潔で適切な身だしなみ、ことば遣い、礼儀正しい態度で対象者に接することができる ② 共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築することができる ③ 周囲における自己の存在を意識した言動を行うことができる ④ 自らが置かれた立場で、必要とされている要件を認識し、他者や指導者の助言などに対して適切に回答することができる ⑤ 対象者、家族のニーズ・要望などに対し、自身の感情を制御して接することができる ⑥ 対象者、家族にとって、相談しやすい雰囲気作りを心がけることができる ・職場における理学療法士の役割と責任について理解し、その一員として自覚のある言動をとることができる。 ① 医療職としての心得や職場内におけるルールを守ることができる ② 部門におけるルールを理解し、診療プロセス（処方の確認、計画書、効果判定、カルテ記録、算定手順など）を理解した言動をとることができる ③ 臨床実習指導者と十分なコミュニケーションを保って良好な関係を維持することができる ④ 積極的に理学療法スタッフや多職種と関わり、良好な関係を構築することができる ⑤ インシデント・アクシデントが生じた際には実習施設の手順に従って対応することができる ⑥ 守秘義務を果たし、プライバシーを守ることができる ⑦ 臨床実習施設における多職種連携の展開について見学することができる ・理学療法の流れを理解するとともに、臨床内容の意義を理解して説明することができる。 ① 検査項目・情報収集項目の抽出・取捨選択の理由を説明することができる ② 検査結果の関連性について説明することができる ③ 対象者が抱える課題を抽出し、その抽出理由について説明することができる ④ 対象者の治療目標を設定し、その設定根拠について説明することができる ⑤ 理学療法プログラムを選択し、その根拠について説明することができる ⑥ 理学療法の時効効果を確認し、その内容について説明することができる ⑦ 実施内容を診療記録に記載することができる ⑧ カンファレンスでの症例提示内容について説明することができる ・指導者の直接監視下で学生により実施されるべき項目（水準Ⅰ）において、次の項目1）～3）を実践することができる 1)リスク管理について ① スタンダードプリコーション（標準予防策）が実施できる ② バイタルサインの計測を実施することができる ③ 意識レベルの評価を見学し、可能ならば実施することができる ④ 各種モニターの使用ができる 2)理学療法評価について ① 情報収集（診療記録、画像所見、部門内、他部門を含む）を実施することができる ② フィジカルアセスメント（問診・視診・聴診・触診）を実施することができる ③ 基本的な検査測定を実施することができる ・形態計測 ・感覚検査 ・反射検査 ・筋緊張検査 ・関節可動域計測 ・筋力検査 ・運動耐容能 ④ 姿勢観察を実施することができる ⑤ 動作観察を実施することができる ⑥ 疼痛の評価を実施することができる ⑦ 日常生活活動評価（手段的日常生活活動を含む）を実施することができる ⑧ 運動器疾患に関する個別検査を実施することができる ⑨ 中枢神経疾患に関する個別検査を実施することができる ⑩ 内部障害に関する個別検査を実施することができる ⑪ 各種発達評価を実施することができる 3)理学療法治療技術について

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験				評価なし	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品	○ （凝縮ポートフォリオ・口頭）	○ （実技）		100	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、臨床実習業務に携わってきた。	

科目名	地域実習				単位数	1	時間数	45	
授業形態	実習	対象学生	P T 3年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	なし
授業概要	地域実習では、実生活の場で対象者支援を行っている通所リハビリテーションや訪問リハビリテーションにおける理学療法を経験することで、地域に根ざした医療として地域包括ケアシステムを理解し、医療職だけでなく、福祉専門職を交えた多職種連携を学ぶ。								
一般目標	地域理学療法の場面での経験を通して、地域包括ケアシステム（特に、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション）における理学療法士の役割を理解し、地域包括ケアシステムに関与する関連職種の役割を理解することができる。								
テキスト 参考書等	3年次地域実習ガイドブック、臨床実習教育の手引き 第6版（日本理学療法士協会、 https://www.japanpt.or.jp/activity/books/education_01/ ）								

到達目標		
知識（認知領域） ・3年次までに履修した専門基礎科目・専門科目の知識について、想起（記憶している）～解釈（理解している）レベルで説明できる。 ・臨床実習で経験した内容について、資料や文献で調べたことをまとめた上で説明できる。 技術（精神運動領域） ・臨床現場で求められる常識的態度や、責任のある行動をとることができる。 ・対象者（患者様・利用者様）とコミュニケーションをとることができる。 ・臨床実習指導者と良好な人間関係を築くことができる。 ・理学療法の役割や流れを理解し、自覚のある言動をとることができる。 ・経験 態度（情意領域） ・挨拶・服装・身だしなみに留意して臨むことができる。 ・報告・連絡・相談を適宜行うことができる。 ・守秘義務の徹底することができる。 ・個人情報取扱いに細心の注意を払える。		
時間数	授業内容	授業目標
40時間	地域実習 実習前の取り組み ①ワクチン接種状況確認 ②実習前面談 ③感染対策 ④学習到達度確認 ⑤実習関連書類の作成 ・実習生プロフィール ・総括的評価およびコメント ・車両持込許可願（該当者） ・部外宿舎入居誓約書（該当者） ・食事申込書（該当者） ・個人情報保護に関する誓約書 ・出席簿 実習中の課題 ①臨床体験・診療参加 ②臨床実習チェックリスト ③臨床実習ポートフォリオ ・デイレート ・臨床経験気づきリスト ・文献収集 ・勉強会や研修会資料 実習後の取り組み ①実習関連書類の提出 ②実習後指導 ③凝縮ポートフォリオ作成 ④口頭試問	・対象者を尊重し、共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築できる。 ① 清潔で適切な身だしなみ、ことば遣い、礼儀正しい態度で対象者に接することができる ② 共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築することができる ③ 周囲における自己の存在を意識した言動を行うことができる ④ - 自らが置かれた立場で、必要とされている要件を認識し、他者や指導者の助言などに対して適切に回答することができる ⑤ 対象者、家族のニーズ・要望などに対し、自身の感情を制御して接することができる ⑥ 対象者、家族にとって、相談しやすい雰囲気作りを心がけることができる ・職場における理学療法士の役割と責任について理解し、その一員として自覚のある言動をとることができる。 ① 医療職としての心得や職場内におけるルールを守ることができる ② - 部門におけるルールを理解し、診療プロセス（処方の確認、計画書、効果判定、カルテ記録、算定手順など）を理解した言動をとることができる ③ 臨床実習指導者と十分なコミュニケーションを保って良好な関係を維持することができる ④ 積極的に理学療法スタッフや多職種と関わり、良好な関係を構築することができる ⑤ インシデント・アクシデントが生じた際には実習施設の手順に従って対応することができる ⑥ 守秘義務を果たし、プライバシーを守ることができる ⑦ 臨床実習施設における多職種連携の展開について見学することができる ・理学療法の流れを理解するとともに、臨床内容の意義を理解して説明をすることができる。 ① 検査項目・情報収集項目の抽出・取捨選択の理由について質問したり調べたりすることができる ② 検査結果の関連性について質問したり調べたりすることができる ③ 対象者が抱える課題を抽出する過程を見学し、その抽出理由について質問したり調べたりすることができる ④ 対象者の治療目標を設定について見学し、その設定根拠について質問したり調べたりすることができる ⑤ 理学療法プログラムを見学し、質問したり調べたりすることができる ⑥ 理学療法の即時効果を確認し、その内容について質問したり調べたりすることができる ⑦ 実施内容を診療記録に記載することが見学できる ⑧ カンファレンスでの症例提示内容について見学し、質問したり調べたりすることができる ・地域理学療法の場面での経験を通して、地域包括ケアシステム（特に、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション）における理学療法士の役割を理解し、地域包括ケアシステムに関与する関連職種の役割を理解することができる。 ① 通所リハビリテーション利用者（個別・集団）に対する理学療法を見学することができる ② 通所リハビリテーション利用者に対する理学療法の一部を経験することができる ③ 訪問リハビリテーションに対する理学療法を見学することができる ④ 訪問リハビリテーション利用者に対する理学療法の一部を経験することができる ⑤ ケアプラン立案過程を見学することができる ⑥ 地域包括ケア会議やサービス調整会議を見学できる

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験				100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品	○ （凝縮ポートフォリオ、口頭			評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、臨床実習業務に携わってきた。	